
ウイナーコーヒー

巖櫻 禄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウインナーコーヒー

【Nコード】

N4316D

【作者名】

巖櫻 緑

【あらすじ】

女子高生、景子がバイト先の喫茶店で体験した不思議なおはなし

（前書き）

まず、ここを見ていただいた読者の方に「ありがとう」を。
そして、「これから宜しくお願いします」

以前に個人サイトで公開していた小説を掘り起こして加筆修正した物です。

短編ですのでチョットしたお時間に読んでいただければ幸いです。

景子は走っていた。

親友の美菜の声が追いかけてくる。

「ケイ! どうしたの?」

「ごめ〜ん! 急いでるの!」

スカートの裾が多少捲れているのも解ってはいたが、それどころではなかった。

マフラーを首に巻かず手に持ったまま校門を走り抜け、景子は心の中であやうくつぶやいた。

「何で今日に限って・・・っん、もう!」

今日はバイトの日だ。

昨日、バイト先のマスターに頼んで今日だけ入れてもらったのだ。自分から頼んでおいて、遅刻するわけにはいかない。

1時間ほど前のホームルーム・・・

「・・・なので、各自明日までに必ず提出すること。いいな。それじゃあ、今日はこれまで。」

ふう・・・終わった。さあ、早く帰らなくっちゃ・・・

「宮脇! ちょっと教員室まで来てくれ!」

・・・!

景子は委員長を務めていた。決してやりたくて立候補したわけではない。頼まれると断れない性格なだけだ。

「はぁ〜い。」

結局、教員室で1時間も粘られ、やっと解放されたのだ。

景子は、駅前の喫茶店でバイトをしていた。
いつも通る駅前の喫茶店。

決して目立つところでもなく、かといって寂れているわけでもない。
ある日ふと目に止まった「アルバイト募集」のチラシ。
何気なくポツと決めてしまった。

母親は何も言わなかった。

父親は物心付いた頃から居なかった。

別にどうと言ったことでもない。詳しく聞いたこともない。
ただ、死んだと聞いた。それだけのことである。

ここ何週間、毎日通ってくる男が居た。

いつも一番入り口に近い角の席に座り、ウイナーコーヒーを飲み、
煙草をふかしながら新聞を読んでいる。

歳は40から50。マスターと同じくらいだろう。ちょうど景子の
世代からすると親と同世代くらいの年齢である。

ただそこで新聞を読んでコーヒーを飲んで帰っていく、何処にで
も居る喫茶店の常連だった。

そんな繰り返しのある日のことだった。

カラン・・・コロン・・・

「いらっしやいませ」

あの男だ。

新聞を取って、いつもの席に座る。

・・・あの人、いつもウイナーよね・・・
メニューを胸に抱えたまま声を掛ける。

「いらっしやいませ、ウイナーでよろしいですか？」

「・・・あ、ああ。覚えてくれたんだ。有り難う。」

「ええ。いつもいらっしやるので・・・少々お待ちください。」
そんな他愛もない、客とウェイトレスとのやり取りだった。

あ、あの人だ。

ウィンナーコーヒーの人。

いつもの席に座ってる。

なんでだろう？いつの間にか自分も向かいに座っていた。

男はいつものように煙草をふかしながら景子の方を見ている。

「真理子は元気でやっているかい？」

真理子とは母親のことだった。

「はい。」

何故母親のことを知っているのか、不思議だった。

「おまえには辛い思いをさせてしまったな。」

「いえ……。」

「母さんのことは頼んだよ。急用が出来てね。私は明日帰らなくてはならないんだ。」

「……父さん……なの？」

いつも使い慣れない言葉だけにとまどいがあった。

「明日もう一度、景子の元気な姿を見に来るよ。」

「……もう最後なの？」

その男……景子の父は目をそらしたまま俯いていた。

「たぶん、もうおまえの前に姿を見せることはないだろう。ただ、いつもおまえのことは見ているよ。これからがんばりなさい。」

「………」

「……有り難う……」

………

「……くん……脇くん！宮脇くん！」

はっ！つと目が覚めた。

マスターが横に立っていた。

あの男・・・景子の父は居なかった。

景子はカウンターにつつぶして寝ていたらしい。

「・・・マスター、あの、父は、あのウインナーの・・・」

「ウインナーの？何のことだい？」

「え？いつも来てくれるお客さんで、ウインナーコーヒー頼んであそこの席で新聞読みながら煙草を吸ってるお客さ・・・ん・・・。」

一気に説明しようとして、何となく気が付いた。

マスターは解ってないんだ・・・私だけが見てた幻想・・・？

「いつもウインナーを頼む客なんて居たかな？しかもあそこの席は・・・ほら・・・」

マスターの指す方に目を向ける。

そこはいつもあの男。そう、景子の父が座っていたあの席。

机の上には「お勧めランチセット」と書かれた札と、ロウで出来たサンプルが置かれていた。

とてもお客が座れる状況ではなかった。

確かに景子も知っていた。あの席が使えないことは。

翌日はバイトの予定が入っていなかった。

「でも、明日来るって行ってたよね・・・」

マスターに頼み、入れてもらうことにした。

マスターは何も理由を聞かなかった。

景子は走っていた。

喫茶店に飛び込むと挨拶もそこそこに準備を始めた。

サンプルが置かれているテーブルの片隅。

いつも父が吸っていた銘柄の煙草とマッチ、灰皿を置き、いつも読

んでいた新聞を置く。

そして・・・

「マスター、ウインナー、オーダーです。」

マスターは何も言わずにウインナーコーヒーを出してくれた。
コーヒーを受け取り、トレーに乗せて運ぶ・・・

ふとあの席を見ると・・・

灰皿に1本だけ吸い殻が載っていた。

席には誰も座っていない。

はっとして入り口の方を見た。

景子はその男の背中を見た気がした。

「有り難う。いってらっしゃい、お父さん。」

（後書き）

仕事柄、まず時間つぶしに喫茶店に行くことなど無いのですが、この間たまたまとある駅前の喫茶店に1ヶ月ほど通うことがありました。

そこでバイトをしていた女の子がモデルです。

その子の父親が居るか居ないかなんて知りませんし、高校生ではありませんでした。

ただ、彼女を見てふっと頭の中をよぎった話をまとめたのがこの「ウインナーコーヒー」です。

一生懸命仕事をしている彼女の横顔を見たときに、ちょっとご褒美に・・・と。

父親が居なくても普通に学校生活を送り、バイトをしているごく普通の女子高生、景子。

なんとなく父親に会わせてみたくなりました。

感想など頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4316d/>

ウイナーコーヒー

2011年10月4日18時33分発行